

【書評】水ノ江和同著『縄文人は海を越えたか？』

「文化圏と言葉」の境界を探訪する 朝日新聞出版2022年4月刊行

西海考古同人会事務局

2023年3月

『西海考古』第13号 抜刷

【書評】水ノ江和同著『縄文人は海を越えたか？』

「文化圏と言葉」の境界を探访する 朝日新聞出版2022年4月刊行

西海考古同人会事務局

異色の縄文文化論である。本書には土偶も火焰型土器も世界文化遺産の三内丸山遺跡もでてこない。でてくる場所は北海道と九州など日本の端か列島に付属する東西南北の島々である。中には無人島もある。

さらに登場する遺物は玦状（けつじょう）耳飾り、石刃鏃、曾畑式土器、結合式釣針、片刃石斧等など一般にはあまりなじみがない遺物ばかりである。かと言って本書が無味乾燥でマニアックな専門書かというと、そうではなく日本の縄文文化の本質を鋭く突くものとなっている。異色の縄文文化論であるが読み終わる頃にはなるほどと納得させられてしまう。

まずは本書の章立てに従って内容を追ってみよう。

「はじめに」で著者は以下のように問いかける。一般には縄文時代の日本は朝鮮半島や極東サハリンなどと活発な交流を行っていたと考えられている。はたしてそれは交流と言えるほどのものだったのか。著者はそれを「交流」ではなく「行き来」であると指摘する。どうして行き来があったのか？ 行き来のルートは？ いつ頃行き来したのか。著者の深く精緻な考察が始まる。

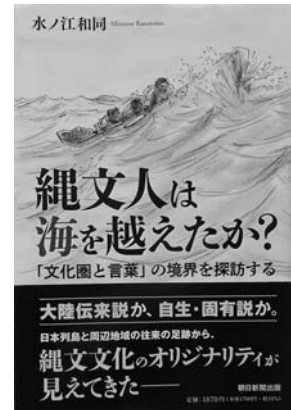
第1章では日本の縄文時代の時代幅、縄文文化の範囲、縄文文化は東高西低か？ など著者らしい読者への配慮として概説が記述されている。そして縄文人が丸木舟という不安定な渡航手段しか持ち併せていないなか、日本列島に付属する島嶼への渡航や進出には積極的でありながらサハリンと朝鮮半島への行き来は、わずかであったことの実態とその要因の解明に全力を注ぐという本書の目的が明らかにされている。

第2章では日本列島に付属する島々を概観する。まず沖縄など南島の考古学の時代区分、南島先史文化は縄文文化か？ といった問いに答えつつ、著者は同文化を縄文文化の中に位置付ける。さらに沖縄以外の島々に目を向け、伊豆諸島・礼文島・利尻島・奥尻島・佐渡嶋・隠岐諸島・沖ノ島・五島列島・草垣群島などを概観しながら、当地に縄文人が生活を営んだ跡を残していることを説明する。しかし生活痕跡はあるものの、沖ノ島や草垣群島などの無人島には渡航理由が全く見当たらないわけで、それでも何故縄文人は海を越えるのか？ と自問している。

一方で、中国など大陸からの日本列島へのルートにも目を向け、縄文時代のいわゆる大陸系遺物である両や青銅刀子を考察する中で、交流とか交易という場合、日本から大陸という双方向的な議論が必要であるが、それが無い点に違和感を覚えると率直な感想を吐露している。

第3章では日本から大陸という双方向的な議論のたたき台となる遺物として両者に存在する玦状耳飾りを取りあげて検討している。しかし著者も悩ましいと述べる通り、それが大陸から伝来したと結論付けるまでには至っていない。

第4章では北海道とロシア極東（サハリン）を取りあげ、両地域の考古学研究史を渉獵しながら、



北海道東部にあって特徴的な石刃鏃文化の研究史を詳述している。同文化を構成する石製装身具である環状石製品・篋状垂飾・小玉などを検討する中で、共栄B遺跡の石製装身具の再検討を行い、玦状耳飾りではなく、石刃鏃文化の環製品の破損品であることを実見の結果明らかにしている。そのうえで、北海道とロシア極東との関係性は予想以上に薄いと結論付けた。

第5章では九州と朝鮮半島との考古学研究史を丁寧に進めながら、曾畑式土器の検討を行い、曾畑式土器の出現に朝鮮半島が関わった可能性は無いか、あるいは極めて低いとしている。さらに朝鮮半島に九州の縄文土器とよく似た土器が出土することに着目しそれらを「九州系縄文土器」と呼ぶことを提唱した。

また、日韓両国の共通した遺物と言われていた結合式釣針を検討し、これもまた交流の証とは言えないと結論付けた。さらに西北九州型片刃石斧についても朝鮮半島のそれとは共通点が無く系譜関係は認められないとした。

続く第6章は本書の結論である。すなわち縄文人が日本列島内では頻繁に往き来しながら、朝鮮半島や極東サハリンなどとは往き来が少なかった原因は十分な意思疎通ができない「文化圏と言葉」の関係性の存在にあるとした。

以上が本書の概要である。これを踏まえて批評を述べてみたい。

本書は考古学の視点から「文化圏と言葉」の問題を考えるにあたり、国内はもちろんのこと、朝鮮半島やロシア極東をも含む周辺地域の遺物についても著者自身の実見という地道な作業をベースとした論述であり、信頼性の高さが表れている。

本書は朝日選書の中の一冊で、選書は新書と専門書の中間に位置付けられる書物である。本書の内容も専門性に溢れているが、各章には多彩な内容のコラムも多く盛り込まれており、早川和子氏のイラストも効果的で、入門書的側面としての配慮がうかがえる。

とりわけ「《コラム》 考古資料の調査・研究 (p.192)」は重要である。ここでは「報告書では実測図や写真をみることはできるが、細部の特徴、質感や色調、土器なら文様の施文方法や施文順序、石器なら細部加工の状況などは、遺物を実見（実測・写真撮影を含む場合も多い）しない限り、わからない。－中略－（実見したい遺物が）「遠方の場合は旅費や宿泊費もかかり簡単ではない。しかしそれでも、考古資料を実見しない限り考古学研究の進展はない。この実見という作業は大変であるが、いくらデジタル技術が進歩しても考古学研究の基礎であり、新たな発見のきっかけであり、それだけに時にワクワク・ドキドキな作業でもある。」述べられている。

これは「実物・現地主義」を信条とする著者の経験に基づく哲学の開示であり、研究者であるとともに教育者のメッセージとしても重要な意味をもっている。

第6章1では、第2章での検討から「縄文時代の日本列島では、それに付属する多くの島嶼にまで縄文人が継続的あるいは断続的に海を越え、そして生活した遺跡が多数存在」した事実を指摘する (p.250)。また第4章の検討結果として「北海道には早期後葉の一時期だけ、アムール川下流域からサハリン経由で石刃鏃文化が海を越えてやってきた痕跡がうかがえる」としつつ、それは「石刃鏃文化の要素の一部を一時的に取り込んだ」に過ぎず、「交流」という評価ではなく「往き来」の評価として位置付けることが妥当」とする (p.251)。

さらに第5章での検討から「九州と朝鮮半島には、早期から後期まで断続的ではあるが「往き来」が間違いなく存在した。それも九州から朝鮮半島へ海を超えた事例が圧倒的に多い。」「対馬島の北西部には、縄文時代前期の一時期、朝鮮半島の新石器時代人たちが海を越えて生活した遺跡がある」が、「縄文人と「交流」をおこなった痕跡は存在しない。むしろ縄文文化のなかにおいて隔絶していた存

在であったとも想定され」という (p. 251)。

以上の事実を踏まえ、問題は「日本列島とそれに付属する島嶼との関係性と、日本列島とサハリンや朝鮮半島との関係性」が、いずれも「晴天時には島影がみえる同様の位置関係であっても、考古学的な状況はまったく異なる」点にあるとし (p. 251)、その要因として「文化圏と言葉」の関係性を指摘する。

つまり島嶼部を含む日本列島全体では、地域差はあるものの「同じ技術や約束事 (ルール) で縄文土器が作られ」ていることから「共通認識が存在する」ことが理解されるが、石器や石製品も含めて「技術や約束事は、目で見て真似るだけではわからないし伝わらない」であろうから (p. 252)、言葉によって技術が伝えられ、また次世代へと継承されていった可能性が想定される、という解釈である。

対して北海道とサハリン、九州と朝鮮半島との関係では、「考古資料をみる限り、－中略－ 技術や約束事に共通性をうかがうことはできない」ことから、「おそらく言葉による意思疎通はほとんどできていなかったと考えられ」「お互いに島影は見えている」にもかかわらず「言葉が異なり意思疎通はできない」がゆえに「交流」にはいたらず「往き来」レベルに留まっている、とする (p. 253)。

そして日本列島には局部磨製石斧・ナイフ形石器・台形石器など独自の石器がみられることから、「文化圏と言葉」の関係性は「旧石器時代にはすでに存在していたと考えられる」が、「言葉の壁を乗り越え意思疎通ができるようになったことを示す遺跡や考古資料の出現が、弥生時代の始まりとされる朝鮮半島からの稲作農耕文化の伝来である。」と説く (p. 254)。

縄文時代や弥生時代の開始年代については諸説あるが、上述の見解によれば少なくとも数千年もの長期間、縄文文化を担った人々と、サハリンあるいは朝鮮半島の人々の間には「往き来」はあっても「交流」は存在しなかった、ということになる。「言葉の壁」は、それほど高いものなのであろうか。

江戸時代の1841 (天保12) 年、乗っていた漁船が難破して鳥島に漂着し、その後アメリカの捕鯨船に救助された中濱万次郎は、1851 (嘉永4) 年、日本への帰国を果たし、教師・通訳など幕末から明治にかけて大きな役割を果たした人物として有名である。英語を習得するまでの過程は定かではないが、アメリカ人と「遭遇」した段階で言葉は通じなかったであろうし、身振り・手振り・表情など非言語コミュニケーションを駆使して意思疎通を図り、少しずつ言葉を覚えていったであろうことは十分に推測できる。言葉による意思疎通の可否は、生死に直結する根元的な大問題だからである。

さて著者は「弥生時代のはじまりには、言葉の壁を越えて意思疎通ができる通訳が現れたと考えられる。」という (p. 254)。これに関係するかは定かではないが、かつて中尾佐助氏は、照葉樹林文化に関する座談会のなかで興味深いことを発言されている。

「日本に水稻を持ってきたのは、単音節の非常に多い言語をもつ連中じゃないかという考え方をのべてきた。－中略－ 現在の話ことばでみると、目 (メ) だとか歯 (ハ) だとか背 (セ) だとか手 (テ) だとか、身体語に単音節のことばが非常に多い。もう一つ、単音節の言葉が多いのは農業用語だろうね。「田 (タ) に実 (ミ) をまくと芽 (メ) が出て葉 (ハ) が出て穂 (ホ) が出る」。何か偶然だろうかね。」(上山編 p. 114~116) というものである。日本語は1音語・2音語の多い言語として知られている。仮に弥生時代の人々が稲作農耕文化の人々と言語による意思疎通を図ろうとした場合、1音語は単純で覚えやすく、分かり易い言葉だったのかもしれない。現在の日本語と当時の言葉が同一であった保証はないが、自然界の身近な事物を見ても、空 (ソラ)・海 (ウミ)・山 (ヤマ)・川 (カワ)・谷 (タニ)・沢 (サワ)・水 (ミズ)・岩 (イワ)・石 (イシ)・砂 (スナ)・木 (キ)・枝 (エダ)・花 (ハナ)・鹿 (シカ)・猪 (シシ)・魚 (ウオ/イオ) など、1音語と2音語が多いことは事実である。

狩猟具である弓矢にせよ、煮沸具としての土器にせよ、すでに保有している装備については造り方も使い方も熟知しているわけだから、あえて言葉の通じない人々と交流して意思疎通を図り、無理に情報を得る（教えてもらう）必要はない。型式や様式の違いも、お互いを尊重しておけば済むことである。しかし稲作農耕という新たな食料生産手段は、そうはいかない。農耕にかかるシステムの構築と運用、儀礼等についての情報は、著者が指摘しているように「言語」による意思疎通が不可欠と考えられるからである。「言葉」というものは、その難易度もさることながら、必要に迫られれば必死になって習得し、そうでなければあまり関心が向かないのかも知れない。

狩猟・漁撈・採集を生業とする縄文人にとって、異なる言語の人々と交流する必要性が低かったが故に数千年という長い時間をかけても「交流」にはいたらず、弥生時代になると農耕文化を受容するために言語コミュニケーションが急速に発達した、というのは極めて合理的な解釈といえよう

この本は、緻密な考古学的アプローチから縄文時代における「境界」の問題を解明し、言語によるコミュニケーションの存否にまで言及した意欲作である。

V.G.チャイルドが述べているように「言葉は、録音機に収められるか書記によって記録されるかしなければ、考古学的記録としてはなんらの痕跡も残さない」(V.G.Child 1969 p.2)。それゆえ「言語」の問題は、考古学では語ることの難しい領域である。言語学・文化人類学・地理学など多方面からの検討が必要なことはいうまでもないが、考古学的研究として言語の領域に切り込んだ意義は大きく、今後の展開を大いに期待するものである。

以上の批評を踏まえ、読者には良書といえる本書を一読されることをおすすめする。

文末ながら著者のプロフィールにも触れておく。著者は福岡県北九州市出身で同志社大学において考古学を学び、福岡県教育委員会、九州国立博物館、文化庁を経て現在は母校の教壇に立ち、後進の指導にあたるというきわめて名誉でありながら、重責を伴う立場に身を置いている。長崎県との関わりは古く、学部の3年生の時に本県諫早市の伊木力遺跡の調査で曾畑式土器と出会ったことが本書のきっかけとなったと書中で述べているように、著者のその後の長い研究のスタートが、本県の遺跡であったことは極めて感慨深い。

現在でも長崎市にある特別史跡出島の整備や対馬での発掘調査などでたびたび来県され、指導にあたられている。最近では前述の伊木力遺跡の出土遺物を諫早市に譲与するという英断をくだされ、昨年11月17日に実現したばかりである。

【引用文献】

- 上山春平2001『照葉樹林文化論 日本文化の深層』中公新書
V.G.Child 著 近藤義郎, 木村祀子 訳 1969『考古学とは何か』岩波書店